

平和聖日 説教 「安息日の主」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年8月7日

マタイによる福音書 12:1~8

今年も平和聖日を迎えました。多くの犠牲者を出した先の大戦を覚えて、戦後、行事暦に定められたものがこの平和聖日でありました。ただ、今年は今までは違った気持ちでこの日を迎えたように思います。それは、今、目の前にある危機、迫りつつある脅威、これらのものを具体的に感じているからです。それゆえ、これまでのように戦争反対と、それだけを言ってすまされるものではありません。求められていることは、私たちがいかなる主張をするかではなく、いかに振る舞うか、であるからです。そして、それは、私たちに具体的に守るものがあるからです。そして、ここに、戦後、私たちが8月の第一主日を平和聖日に定めた意味があるようにも思うのです。

ところで、私たちの神様とはいかなるお方なのでしょう。それは、恵みの神様であると同時に、聖書が「万軍の主」と語るように戦いの神様でもあるのです。そして、この戦いの姿勢は、その独り子であるイエス様にも受け継がれているように思います。それは、ファリサイ派や律法学者たちと、イエス様が事ある度毎に対決しているからです。そして、それは、ここでもそうです。弟子たちの安息日の守り方を巡って、ファリサイ派の人々に批判されたイエス様が、彼らに対して強く反論しているように、このように黙ってははいられないのが私たちのイエス様でもあるのです。ただ、この箇所を一読して思うことは、彼らの批判が的外れであるということです。なぜなら、安息日のこととはいえ、たまたま通りがかった麦畑で、弟子たちが空腹のために麦の穂を折って食べたからといって、これほど強く咎めだてされる理由がどこにあるのかと思うからです。けれども、ファリサイ派の人々はそれを見逃しませんでした。イエス様と弟子たちに向けられた批判はそんな彼らの強い思いの現れでもあります。ただ、それだけにまた、イエス様の言い分の正しさが現されているようにも思うのです。

しかし、ファリサイ派の人々も、まったく無意味にイエス様を批判しているわけではありません。彼らには彼らなりの言い分がありました。それは、彼らには

守るべき大切なものがあり、それを弟子たちが犯したから、イエス様たちに向けられた批判はそれゆえのことでもありません。しかも、イエス様も弟子たちも彼らと同じユダヤ人です。そうである以上、ファリサイ派の人々と同じように守らなければならないものがあり、しかも、彼らはその道の権威です。多くの人々が彼らの意見に従っていたわけでもありません。ところが、弟子たちはそれに従わなかった、少なくとも、ファリサイ派の人々はそう思ったということです。そして、この彼らのおかしな言い分は私たちと無関係ではありません。私たちの信仰と深く関わるものであり、それゆえ、私たちがまたここでの言い争いを見過ごすわけにはいかないのです。それは、安息日は私たちにとっても決してなござりすることのできないものだからです。

ただし、この、安息日が大切であるということは私たちもよく知っていることです。そして、これについては、信仰が厚かろうが薄かろうが関係ありません。安息日を大切にし、それが守るべきものであることは私たちの誰もが知っていることだからです。それは、出エジプト記20:8以下にこうあるからです。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。6日の間働いて、なんであれあなたの仕事をし、7日目には、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事をしてはならない。」と、そこではこう記されているのですが、ですから、私たちが安息日を深く心に留めているのは、十戒でこのように固く戒められているからです。そして、それは、私たちが安息日を守ることを通し、あることを知らされているからです。それは神様がこの私たちと「共にある」ということです。つまり、十戒が荒野を旅するイスラエルの民に与えられたように、神様の祝福から外れているかのように見えるその時にも、命を支え守る神様の御心が私たちの上にはしっかりと働いているということです。しかし、時に安息日を守る守らないと、私たちが、いわゆる「べき論」に走ってしまうのはそれゆえのことでもあるのです。

神様が共にあるということは、どんなときにも神様は私たちと共にいてくださっているということで、本来は議論すべ

きものではありません。ところが、それを知っていたとしても、それが分からなくなることがあるのです。そんなことはない、神様はどこにいるのかと、あるいは、どこでも一緒なら、他のものを優先してもいいじゃないかと、私たちが神様の前に出て行くことに躊躇し、あるいは、高をくくったりするのは、知っていたとしても分からなくなることがあるからです。そのため、私たちは、この安息日については、どうしてもそれを守るか守らないかというところから話を始めてしまうのです。けれども、この安息日の戒めにおいて問われていることは、そういうことではありません。神様があらゆる命を支え守っているということ、それが神様が共にあるということであり、それゆえ、この神様の秩序のもとに置かれた私たちは、安息日、神様の御前に集まって、この恵みを深く味わい知ることになるのです。

ですから、ここでイエス様が「私が求めるのは憐れみであって、生け贄ではない」と仰ることは、私たちが安息日の度毎に経験する、この神様の御心のそのままを語ったに過ぎません。ただし、それがイエス様の口を通してここで淡々と語られているように、大事な点は、この神様の憐れみが7日毎に繰り返されているということです。つまり、私たちの深い思いや、あるいは、無関心にかかわらず、7日目に私たちが必ず経験するものがこの神様の憐れみであるということです。そして、この神様の憐れみがこうして繰り返されているのは、それこそが人間にとって最も必要なものでもあるからです。ところが、ファリサイ派の人々にはそれが分からなかった、舌鋒鋭くイエス様を批判しているのはそのためです。けれども、イエス様には分かって彼らに分からなかったというのは、イエス様が神様の独り子であることを考えれば当然のことです。まただから、イエス様も最後のところで、「人の子は安息日の主なのである」と仰っているわけですが、ですから、問題は、イエス様にはそれが分かって、ファリサイ派の人々にはそれが分からなかったということではありません。ファリサイ派の人々が、自分たちは分かっているが、イエス様たちはそれが分かっているはいなかったという、彼らこの思い違いこそが問題であるのですが、では、それがどこから出てきたのか。その理由は彼らの無知によるものでもありませんが、しかし、もしそれが、御言葉がここでこのようなことを語っている理由で

あるとしたら、それこそ、神様の憐れみをはっきりと理解できる者は、イエス様以外いないことになってしまいます。

従って、そこでは、どちらが正しく、どちらが間違っているかの議論は意味をなしません。ですから、そこでもし私たちが、自分が分かっている、相手が分かっていると言っているところでのこの問題を取り上げるなら、それは、私たち自身が、実は何も分かっていないということにもなってしまいます。それだけではありません。私たちがもし自分の言い分を何が何でも通そうとして実力行使に出るとしたら、それこそ、それは論外だということですから、もし仮に、私たちが信仰の戦いと称して、戦うことしか目に入らないとしたら、その時、私たちは、自分自身が実は自分は何も分かっていないということを露呈することにもなるのでしょう。しかし、このことはまた、だから私たちがただ押し黙ってさえいればいいということでもありません。ここでのイエス様がそうであったように、神様の御心がどういうものであるのか、その秩序の許に置かれているということがどういうことか、この点については、私たちは自分の言葉で語れるように、日頃からしっかりと学んでおく必要があるのです。そして、それは、先週礼拝において学んだことでもありますが、つまりは、私たちが自分の言葉で何かを語るということは、イエス様の軛を負いつつということでもあるのです。ですから、今日の箇所はそのことを合わせて私たちに教えてくれているように思えます。それは、誰よりも熱心に聖書のみ言葉に聞き、聖書のそのまま実践していたのがファリサイ派の人々であるからです。

イエス様という軛を負いつつ「学ぶ」ということはどういうことなのでしょう。それは、多くの知識を得て、多くの言葉を持って、充足感を得る多くの体験をすることではありません。そのことを図らずも明らかにしてくれているのがファリサイ派の人々であります。けれども、だからといって、情緒に流され、情動に駆られていいということではありません。それは、神様の御心の下に生きるということが、知に働くことでもなく、また、意地を通すことでもなく、あるいは、情に棹さすことでもないからです。なぜなら、私たちの立つべきところが神様の御心である以上、そこは憐れみに満ちたところであって、生きにくいところであろうはずはないからです。またただか

ら、ここでイエス様が「神殿よりも偉大なものがここにある」と仰るのです。それゆえ、私たちはあらゆるものに優る、神様の御心の上に立って、身につけるべきものを身につけることになるのですが、ですから、そういう意味で、私たちににとっての学びは、私たちに効率を求めることはありません。それは、いわゆる「べき論」と言われているものも、効率的に身につけようとするものも、それだけでは学びとしては甚だ不十分なものであるからです。それは、私たちの学ぶべきものはそのような表面的なものではないからです。それは、自分の奥深くに秘めている、それこそ、墓場まで抱えていくしかないようなものを含め考えるなら、よく分かることなのではないでしょうか。ですから、そういう意味では、ファリサイ派の人々はそれを身をもって明らかにしてくれているようにも思うのです。けれども、それと同じように明らか矛盾を含んでいるのが私たち自身でもあるのです。

それゆえ、学びのために必要なことは様々な矛盾を排除することではありません。まただから、非効率だとも言えるのですが、けれども、御言葉が私たちに求める学びとは、この矛盾のただ中にじつと止まればこそ、そこで初めて身につくものでもあるのです。例えば、敵を愛せと仰ったイエス様の言葉はどうでしょう。この言葉については皆さんよくご存知のことと思いますが、ところが、その月足らずの弟子であるパウロはどうだったのか、自分に敵対する人々をあの馬鹿者、犬どもとまで言っているのです。ちなみに、宗教改革者ルターも敵対する者に対しては、これは現代に生きる私たちが聞いたなら、間違いなく躓きを覚えるに違いありませんが、本当に口汚く罵ったのが宗教改革者ルターでもありました。ですから、御言葉についても、私たち教会の歴史についても、そこにはここかしこに多くの矛盾を見出すことができるのです。そして、それが歴史というものでもあります。それは、多くの矛盾をはらんだ私たち人間によって築かれたものが歴史というものでもあるからです。けれども、神様の御心の内に置かれている私たちが御言葉を通し学ぶことは、その私たちがいかに汚く、いかにダメで、いかに役に立たないかということだけではありません。もちろん、それもしっかりと学ぶことにはなるのですが、神様の秩序の許に私たちが置かれているということは、そういう救いようもない

話ではないからです。

では、神様の御心の内に置かれ、矛盾多き自分自身であることを知って、そこで私たちは何を学ぶのか。また、学ぶということが具体的な行動、その所作を身につけることでもありますが、では、神様の秩序の下に置かれた私たちの身につけるその所作、行動とはどういうものなのか。それは、流れにうまく乗って上手に泳ぎわたる技術ではありません。処世術を身につけることは大事なことだと私は思います。けれども、イエス様の十字架が明らかにしているように、処世術を身につけさえすればそれですべてが万事うまく行くものではないのです。私たちに必要なことは長く泳ぎ続けるための持久力であって、研ぎ澄まされ、洗練された高い技術ではありません。それは、私たちがプールのような整った環境に生きるものではないからです。常に変化する大きく広い海のようなところに生きてるのであって、まさに荒野のような場所が私たちの生涯を過ごす場所でもあるのです。けれども、そのようなそれぞれの生涯においては、状況に上手に対応できる者もいれば、それができない者もいます。また、できるできない以前に、どんなに努力しても、始めからそれすらも適わない者もいるのです。ですから、聖書の御言葉だけでなく、私たちの歴史が矛盾に満ちあふれているのは、このように実に神様の御前にあって様々な姿を現しているからでもあります。けれども、神様はその私たちのことを一斉に7日の度毎にその御前に集めようとしているのです。そして、そこで私たちが受けるのが神様の憐れみでもあるのです。

しかし、この神様の憐れみについてではありませんが、それがイエス様の十字架によって明らかにされたように、それは本当に飲み込みづらいものでもあるのです。ですから、私たちが飲み込みやすいものを求めてしまうのはそのためです。まただから、ファリサイ派の人々がそうであるように、正しいこと、間違っていないことを求めたりもするのです。それだけではありません。そこで、一つ考えたいのですが、私たちが神様の御前にあっていい子でありたい、いなければと思うのはどうしてなのでしょう。それは、自分自身を誤魔化し、不都合なものを隠そう隠そうとしているからです。そして、それがまさにここでのファリサイ派の人々だと思えるのです。ですから、この手のかかる面倒な人たちのことは、安息日の恵みの外にたたき出した方がよっ

ぼど世のため、人のためになるのではないかとも思うのです。ところがどうでしょう。イエス様はこの人たちを目の前から追い出すどころか、手のかかるこの人たちのことを本気で、真剣に相手をしていくのです。ですから、私は、ここに「私が求めるのは憐れみであって、生け贄ではない」と仰るこの言葉の意味が表されているように思います。つまり、イエス様が私たちと共にいてくださっているというところには、私たちを追い出す意図はないということです。けれども、私たちはどうしてもそうとは思えないのです。それはいつ追い出されるかとビクビクしているからです。ですから、何を学び、何を身につけるかは、ここから分かるように思うのです。それは、神の憐れみの下に生きること、こうして生きていくことに、私たちが心からの安心を覚えること、まただから、主の日を御言葉は安息日と、そう呼んでいるようにも思うのです。

そして、この安息日が安息日であることを本気で真剣に確かめなければならぬ時代が今の時代であるように思います。それは、安息日が六日間私たちが積み上げてきたものを手放す時であり、どれだけ多くを効率的に生産したか、効率的に利用しているか、そういった効率さによって評価されるものに私たちが完全に背を向ける時でもあるからです。それは、手放し、背を向けることによって、私たちが私たちがであることに心からの平安を得ることができないからです。まただから、自分で作り上げてきたものに常に追いかけて生きる私たちが神様のもとに立ち帰るからこそ、神様に造られ、愛されている自分自身を取り戻すことになるのです。ですから、そこで大事なことは「できる」ということではありません。そう「なる」ということであり、それゆえ、安息日を守るか否かということに拘る必要はありません。私たち自身が神様との交わりの中に置かれ、私たち一人一人が神様にこの世界で一番愛されているとの思いを取り戻すこと、そして、それは、安息日の礼拝で私たちはこの神様の憐れみに無条件で与っているからです。だから、自分を取り戻した私たちは福音以外の何もを持たずにこの世界へと送り出され、そこで、神様の御心を現すことができるのです。ですから、私たちが自律と自己充足を手放して、安息日を守り続けること、それ自体が私たちにとっての学びであるとも言えるのです。そして、この私たちの

歩みに終わりはありません。イエス様の御許に召される時まで続けられるものであり、だから、私たちは、その日を感謝と喜びをもって迎えることになるのです。

けれども、私たちのそうした歩みに深い影を落とす、戦争というパワーゲームはどういうものなのでしょう。それは、いかに生産し、いかに消費するという、効率と、限界を認めようとしなない人間の傲慢に基づくものであり、つまり、手放すことではなく、どれだけ多くを所有し、それを利用できるか、この自分の思いをリスクを冒してまでも、何が何でも成し遂げようとするのが戦争というものなのです。そして、その愚かささと悲惨さを身をもって知ったのが私たちでもありました。平和聖日はここから生じたものでもありますが、それは、繰り返される安息日を通して神様の憐れみを受け、私たちは真の平安を身に負うことになったからです。そして、このことは教会でしか学べないものです。御言葉を通してでしか知り得ないものです。それは、世界の主である神様と私たちの救い主であるイエス様が私たちと共にいてくださっているからです。そして、このことを私たちは聖書の御言葉を通してだけでなく、イエス様がその命を私たちのために差し出されている聖餐の恵みを通して、この神様の憐れみを味わうことが許されているのです。しかし、そのことによって、戦争も貧困も貪欲な消費欲も、私たちが包んでいるこの世のあらゆる矛盾がそれで直ちに取り除かれるものではありません。罪ゆえの諸々の問題の最終的な解決は神様の御手に委ねられているからです。けれども、その終わりの日を私たちは、少なくとも私たち藤沢教会は、すべての人と感謝と喜びの中に迎えたいと思っているのです。ですから、そのためにも私たちは安息日を安息日として、それがどんなに非効率で不合理なものだと、人からそう見なされたとしても、これからも感謝と喜びをもって、この日から主の安息を覚えつつ一巡りの歩みを過ごしていきたいと思うのです。なぜなら、私たちのこの感謝と喜びが一人でも多くの人と私たちが分かち合うことができるなら、その時には一つ、確実に争いの種を摘むことになるからです。ですから、これからもこの私たちの繰り返される7日の旅路をこうして共に守り続けていきたいと思いを祈りましょう。